

燕 岳



燕岳山頂

2005年9月30日(金) - 10月1日(土)

オヤジ隊今回のミッションは、北アルプス3大急登のひとつに数えられる登りを征して、燕岳に登頂、槍ヶ岳方面に縦走して大天井岳を落とすというもの。危険な箇所は無いものの、軟弱な足腰には少々厳しいルートである。燕岳は槍ヶ岳をめざす表銀座コースの基点の山として人気の高い山である。…と、カッコよく書いたが、この山は北アルプス入門の山と言われ、ふもとの中学校の生徒が学校登山で登る山である。八ヶ岳の主峰赤岳を征している我がオヤジ隊にとっては、どうと言う事のない山なのである。…たぶん。

ちなみに「燕岳」は「つばくろだけ」と読みます、「つばめだけ」ではありません。

1日目 9月30日(金)

まだ明けやらぬ午前4時半、希望が丘駅前に集合した親父隊のメンバー。今回のミッション参加者は、鈴木隊長・山崎隊員・萩生田隊員・川村隊員・坂本隊員に新入会員の青柳隊員、そして私ムッシュこと向山の、オヤジ7人。少々眠そうな顔ながらみんな元気である。山崎隊員と坂本隊員の車に分乗し、中央道豊科ICに向け早速出発。

車の少ない早朝の道路を快調にかっ飛ばし、豊科に着いたのは8時前。出発時には晴れていた天候は、山梨県に入った頃から雲が多くなり、北アルプスの峰々は雲に隠れて見ることができない。コンビニで食料を調達し、山に続くワインディングロードをギンギン攻めて登りつめ、登山口の中房温泉に無事到着。平日の朝なのに駐車場には結構な数の車が既に駐車してある。紅葉の時期、人気のある山であることがうかがわれる。ちなみに中房は「なかふさ」と読みます、「ちゅうぼう」ではありません。…知らなかった(隊長)

温泉の入り口に架かる橋のたもとを左に入ると、そこが燕岳への登山口(標高1,462m)。我がオヤジ隊も早速身支度を整え、登山届を出し歩き始める(9:00)。さすが北アルプス三大急登、いきなり急な登りに。ペースがつかめないうちに急な登りで、メンバーの口数も少なくなる。さすがに登る人の多いコースだけあって登山道はよく整備されている。勾配が無ければ文句無いのですが…。



標高差100mを一気に登り、そろそろ休みたいと思う頃、第一ベンチ(中房温泉より1.0km 1,660m)に到着(9:40)。この登山道には途中の合戦小屋までの間に第一~第三ベンチ、富士見ベンチの4ヶ所のベンチが設けてあり、本当にいいタイミングでベンチが現れ大変助かる。第一ベンチには水場があるのだが、ベンチからかなり下った所なので



体力に自信の無いオヤジ隊のメンバーは余計な行動は慎むのだった。

急な登りの連続する樹林の中の道を第二、第三、富士見ベンチと順調に高度を上げる。富士見ベンチを過ぎたあたりで雲の上に出たために周りの山々が見えるようになる。



途中ですれ違ったおばさんが「上はいい天気よ」と言っていたのは本当であった。合戦小屋に11時50分到着。小屋の前のテーブル(?)で昼食。坂本隊員はいつものようにパンを食べてさっさと寝てしまいます。青柳隊員は、速攻でラーメンを煮てます。私は面倒くさいので小屋で売ってい



るうどんを食べてしまった。山崎隊員と、萩生田隊員は早くもレギュラーを給油。青柳隊員は、日頃からけっこう山を歩いているとのこと。頼もしい新入隊員である。その上、若い頃バイクのレースに出ていたとか、同じくレーサーだった坂本隊員と話が弾んでいました。

食後暫くマッタリして緩んだ心に気合を入れなおし、今日の宿泊先である燕山荘を目指し出発。(12:40) 急登の続くこのルートの中でも最も厳しい登りと言われる合戦の頭までの道を喘ぎながら登りつめる。森林限界を過ぎ、木立が無くなったと思ったところにベンチが現れ、視界が開けた。合戦の頭に到着。前方の稜線上にスイスの山小屋風の燕山荘、その右手に燕岳山頂を見ることができる。ちなみに「燕山荘」は「えんざんそう」と読みます、「つばくろさんそう」ではありません。このあたり、面倒くさいです。

暫く歩いて、最後の階段を登りつめると燕山荘(13:45)。前庭からは紅葉の西穂高岳から奥穂高岳、眼前に槍ヶ岳等々北アルプスの名だたる山々が見渡せる。雲海の上に連なる大パノラマに、ここまでの苦勞が吹き飛んだ瞬間であった。他のメンバーも感涙に咽んでいる。…わけは無い。「いやいや、この景色見たらまた登りたくなるよね～」はいはい、今日の予定では山頂まで行って帰ってくることになってますよ。というわけで、山小屋に荷物を置いて燕岳山頂までもうひと踏ん張り。

山頂までは30分位の行程。白い花崗岩とハイマツの緑が美しいコントラストをなし、奇岩のオブジェが林立する中をぬって比較的なだらかな登山道を登り、標高2,763mの山頂に立つ(14:30)。山頂からは周囲360°の素晴らしい眺望。穂高連峰から槍ヶ岳、立山、剣岳そして白馬連峰と北アルプスの名の有る山の殆どが見渡せる。東に目を転ずれば雲海の向こうに八ヶ岳、富士山、北岳のピークも顔を出している。一説には標高



燕山荘前より槍をバックに

燕岳より燕山荘をバックに立つ私だ



700メートル以上の山が94座も見えるとのこと。坂本隊員は、青柳隊員がプリントアウトして持ってきた頂上から見える山の名前を記入したイラストを見て、山名同定に興奮気味。我が隊で唯一穂高や槍を登っているホンマもんのクライマーである坂本隊員であるが、その足元を見ると、なんとサンダル履き。山小屋に着いた時(と言っても坂本隊員は一人小屋の前でテント泊なのだが…)履き替えて、そのまま登ってきたのです。山をなめているとしか言いようがない!

山頂に一人居た青年にお願いして写真を撮ってもらい燕山荘へ戻り、後はお楽しみの夕食。おっと、その前にやっぱり一杯やらないとね。燕山荘は大正10年の創設だそうだが、ログを組み上げた立派な佇まいは、スイスの山小屋のようである。内部も立派な作りで、食堂も広く、喫茶サンルームでは生ビールに、コーヒー、ケーキセットまであって山の上とは思えない。我々も食堂に陣取って、早速生ビールで乾杯。冷たい生ビールが下界と大して変わらない値段で飲めるのだから、苦労して重たい缶ビールを運んでくることはありません。体力が落ちた分は、財力で補うのが正しいオヤジの姿です。…が、萩生田隊員、おもむろにウイスキーのボトルを取り出す。なんと氷まで! ペットボトルの水を凍らせて持ってきた物ですが、溶け切っていないので、水割りを作るのに十分な冷たさをキープしています。しかし、重かったであろうに。私なんかポケット瓶一本持ってくるのも考えたのに。それにしても、こんな山の上で生ビールが飲めるなんて世の中便利になりました。ここで、あんまり飲んだ飲んだと書くと、そのためだけに山に登っていると誤解されるので、テキトーにしておきますが…実際、オヤジ隊も山の上であんまり飲むとロクなことが無いことは学習していて、適当に切り上げました。というより、飲みすぎると晩飯が食べられなくなるという理由の方が的を射ています。

一人で夕食をとるといふ、孤高のクライマー坂本隊員はテント場に戻り、他のメンバーは食堂で夕食。金曜日の夜なのに満員。食事も二組の入れ替え制であった。ツアー登山の団体が入っているためもあるのだろうが、いつかの常念小屋とは大違い。山小屋のスタッフも親切できちんとしていて、気持ちがいい。常念小屋とは大違い。…あつ、こんなこと書くと常念小屋の人に怒られちゃいますね。川村隊員も味噌汁こぼしたりしなかったし…肝心の夕食のメニューですが、私、よく覚えていないのです。メインディッシュは魚だったと思うけど…おいしかったのはよく覚えているんですけどね。

ミーティングで明日の出発を4時半頃にすることに決定して、一旦部屋に引き揚げる。山崎隊員、川村隊員と私の三人は食堂に戻りしばし雑談。テレビで、燕山荘名物のオーナーのアルプホルン演奏とお話のビデオが始まった(本日オーナー不在の為)のを潮に、我々も部屋に引き揚げる。下界では考えられない時間に眠りにつく…なんと健康的でしょう。

… Z Z Z Z Z

2日目 10月1日(土)

3時半、山小屋のスタッフよりも早起きしたオヤジ隊のメンバー。小屋を一番に出るなんて、オヤジ隊始まって以来の快挙です。この日我々は、なんちゃって路線のオヤジ隊の記録にまた新たな金字塔を打ち立てたのでした。

今日は、大天井岳へピストン、昨日のルートを下山という予定である。天候は東の空は晴れて安曇野の光が見えるものの、西の空は黒く沈んで、下り坂の様。天気が崩れる前の早めの行動が肝心のようだ。アタックザックに荷物を入れ替え、小屋に頼んで作ってもらった朝食の弁当も入れて準備OK・・・



でも、ちょっと暗すぎるのもう少ししてからということになって、5時にスタートと決定。やっぱ、「なんちゃって」じゃん！・・・ちなみに「大天井岳」は普通「おてんしょうだけ」と読みます。「おおてんしょうだけ」「だいてんしょうだけ」などと呼ぶこともあるらしいが・・・めんどくさ！この大天井岳、燕岳から槍ヶ岳に向かう表銀座コース中の最高峰(2,922m)であるが、槍ヶ岳向かう登山者の殆どは、北西を等高線沿いに巻く喜作新道という縦走路を通る為この山の頂上を踏むものは少ないのだとか。

5時！まだ明けぬ登山道をヘッドランプの明かりを頼りに歩き始める。ヘッドランプを点けて歩くなんで、これまたオヤジ隊始まって以来の快挙です。カッコイイ！歩いているうち、日が昇ってきた。青黒かった稜線に絵の具をひと刷きしたように赤味が差す、美しいモルゲンロート。これからたどる稜線の道が朝日を受けて輝いている。しかし、槍ヶ岳など西の山々は徐々に雲に覆われ始め、山頂は雲の中である。大天井岳まですぐそのようだが、なかなか距離が縮まらない。険しい登りもなくどちらかと言えば単調な道が続く。1時間ほど歩いたあたりで燕山荘で作ってもらったおにぎりの朝食。炊き込みご飯のおにぎりで大変おいしかった。

大天井岳直下の切通岩の鎖場を下降した所に小林喜作のレリーフを埋め込んだ岩があり、おばちゃん登山者が一人コーヒーを飲んでいた。レリーフの先を右にとると槍ヶ岳へ続く喜作新道、左の登りが大天井岳山頂への登りある。最後の登りにかかった頃からガスがかかり始め、視界が利かなくなってきた。7時45分、大天井岳山頂に到着。山頂からの眺めはガスで真っ白。常念岳の時と同じ、何も見えない。写真を撮って頂上直下にある「大天荘」で休憩。ちなみに「大天荘」は「だいてんそう」と読みます、「おおてんそう」ではありません。

30分ほど休憩してから来た道を引き返す。歩き始めてすぐ、登山道に雷鳥を発見。名前の通り天気が悪くなると出てくるのです。人を怖がらないのか、すぐ近くまで寄っても逃げない、山崎隊員の前をちょこちょこ歩いて



いく。おとなしく写真に納まってくれた。

西風が強くなり、湿った霧が体を濡らす。「燕山荘」までひたすら歩くだけになってしまった。こうなると、書くことがなくなってしまいます。ただ歩いただけなので…。

10：30 燕山荘に到着。デポしてあった荷物を整理し、一休みしてから下山の途につく。土曜日とあって続々登ってくる登山者とすれちがい、霧雨の中、すたすた下山。今日も合戦小屋で昼食。

さて、あとひと踏ん張りだ、と思って歩き始めようとする、鈴木隊長が「ムッシュはこたパパに付き合っただけ、よろしく。」とおっしゃる。先頭を下山し始めた坂本隊員と一緒に走れとの命令です。坂本隊員の下山のペースは尋常ではないのです。別に一人で先に行っても全然大丈夫でしょうけど、一人じゃ寂しいかなと思ってついて行くことにした。殆ど駆け下りるようにしてがんがん下る。下ってみると、よく登って来たな、と思うほどの急峻な登山道である。本当によく登りました。坂本隊員は途中のベンチでも休憩を取らず、どんどん下っていく。私も必死でついて行ったが、最後の第一ベンチあたりで完全に置いて行かれ、足もがくがくになってペースダウン、最後の急な下りを降りる頃はもうヘロヘロ。一人寂しく中房温泉に辿り着く。最年長の私にこのような過酷な任務を与えた鈴木隊長は、私の体力を買いかぶっているのか、でなければ氷のような心を持った鬼隊長と言うべき人物でありましょう。

降りてくる途中で、お母さんが1～2歳くらいの子をおんぶし、お父さんが3～4歳くらいの子の手を引き登ってくる親子連れと出会った。おんぶされている子はともかく、歩いている子は大変だろう。大人でも大変な登りなのだ。自分の身長ほどもある段差を数え切れないほど乗り越えなければならないのだから。お父さんの方はどう見ても山男タイプには見えない、きっと、お母さんのほうが学生時代に山岳部か何かに所属していて、子供が大きくなるのを待ちきれずに、おぶってでも山に登りたい！と、お父さんを説得してやって来たのであろう。数年後には逞しい山屋ファミリーとなっていることは確実である。

登山口で1時間ほど待っていると、鬼隊長を先頭に本隊のメンバーが下山してきた。お疲れ様でした。ということで、山の汗を流しに温泉へ。中房温泉ではなく、車で少し下った所にある「有明荘」の温泉に行くことにする。ログハウス風のしゃれた建物の「有明荘」、森の中の広い露天風呂が気持ちの良い温泉であった。



さっぱりした後、穂高の町に下り、何とか言う蕎麦屋を見つけて腹ごしらえ。結構おいしかったが、なんていう蕎麦屋だったかなあ。

蕎麦屋を出たのが5時、後は高速をとばして横浜へ。私、高速を降りてからの、鈴木隊長のアバウトに的確な道路情報と、無謀と紙一重の華麗なドライビングテクニックに魅了されました。

『みなさん、うちに帰るまでが登山ですよ。』

さて次なるミッションは…？

- 終 -

オヤジ登山隊 燕岳

行程 (一部テキスト)

◆ 9/30

4:30 希望が丘駅集合 出発 🚗

5:50 談合坂SA 🚗 7:50 豊科 🚗 8:35 中房温泉

9:00 スタート 🧑‍🌾 9:42 第一ベンチ 🧑‍🌾 10:05 第二ベンチ 🧑‍🌾

10:40 第三ベンチ 🧑‍🌾 11:20 富士見ベンチ 🧑‍🌾 12:10 合戦小屋(昼食)

合戦小屋 12:40 🧑‍🌾 13:10 合戦の頭 🧑‍🌾 13:45 燕山荘

燕山荘 14:00 🧑‍🌾 14:30 燕岳山頂

◆ 10/1

4:00 起床 5:00 出発 🧑‍🌾 7:45 大天井岳山頂

8:20 大天荘発 🧑‍🌾 10:30 燕山荘着 11:00 燕山荘発 🧑‍🌾 13:30 先発隊中房温泉

14:20 後続部隊中房温泉

メンバー

鈴木隊長 山崎 坂本 萩生田 川村 青柳 向山

大天井岳への道



大天井岳山頂

